

分裂と包容の岐路



佐橋亮・東大准教授

国際秩序の揺らぎは過去10年近く指摘されてきたが、状況はより厳しくなっている。新型コロナウイルスのまん延や米中対立でグローバル化は停滞し、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルのパレスチナ自治区ガザ地区での戦闘拡大が追い打ち

をかけ、本格的に転換点と言わざるを得ない状況を迎えた。

ロシアによるウクライナ侵攻の根本的な原因はプーチン露大統領の野心主義だ。しかし、この侵攻が国際秩序に与えた打撃は大きい。ウイリソン米大統領の「国際秩序はジャングルを動物園に変える」という有名な言葉があるが、世界は逆に弱肉強食のジャングルへと一歩近づいた。

同時に中国やロシアなど権威

主義国家の影響力は増大し、制度的にも結束を強めている。中露アラブなど新興国グループのBRICSがイランやサウジアラビアを含め、拡大したことがその典型だ。

今はまさに国際秩序の岐路だ。先進国中心の秩序に限界が見え、中国のほかグローバルサウスと呼ばれる国々を含めた、包括的な秩序構築ができるのか、という瀬戸際に立っている。

国もロシアを許せないだろう。他方、ロシアに対して厳しい懲罰的な措置を取れば取るほど、新たな秩序は最初からそれへの不満をため込むことになる。そして平和が続く確信が持てなければ、世界の軍拡は止まらない。

世界を見渡せば、このままでは先進国中心の古い秩序と、中国などが作っていく新しい秩序が並立していく可能性が高い。こうした新旧二つの秩序が並列する状況は日本にとっては苦しい。貿易と投資で生きる国にとって、世界のこちらとあちらでルールが違い、大国の利害に振り回されやすい状況は望ましくないからだ。

米国のバイデン政権は少数国による枠組み「ミニラテリスム」を重視する。その中で日本は、日米豪印、日米韓など、さまざまなメカニズムの中心に置かれた。これは、中国による台湾侵攻を念頭に置いた抑止の観点では有効だ。ただ、中国、北朝鮮、ロシアと向き合う東アジアにおいては、抑止を超えた大きな秩序の絵を描く必要もある。地域でも世界でも、私たちが価値観の違う国も含めたインクルーシブ（包容的）な国際秩序を構想する必要があるだろう。

【聞き手・米村耕一】